

《伍倫全備諺解》語彙、語法分析

— 《老乞大》《朴通事》との比較を中心に —

福田 和 展

要旨：《伍倫全備諺解》は明の邱濬が著した南戯《伍倫全備》が朝鮮に伝わり、中国語通訳官養成のための教科書として使用されていたものに、ハングルで中国語音の注音や解釈そして朝鮮語訳を施したものである。本書の序文には「雅俚並陳……最長於訳学」（正俗が並び述べられていて、最も訳学（通訳官養成のための外国語教育）に長じている。）と記されている。本稿では本書と同時期に朝鮮で中国語教科書として使用されていた《老乞大》《朴通事》との比較を通して、本書の文体、語彙、語法の分析を行い、「最長於訳学」とされる本書の言語的特長を明らかにした。

0 はじめに

《伍倫全備諺解》は明の邱濬（1421～1495）が著した《伍倫全備記》が朝鮮に伝わり、「老乞大」「朴通事」と共に中国語会話教科書として使用されたものに、1696年から1720年までの24年間を費やして諺解が付され、翌1721年に刊行されたものである。この《伍倫全備諺解》の序に

本業三書，初用老朴及直解小學，中古以小學非漢語，易以此書。蓋爲語雅俚並陳，風諭備至，最長於譯學。（本業三書は李朝建国当初、「老乞大」「朴通事」及び「直解小学」を用いたが、その後「直解小学」が漢語ではなくなったので本書に代えた。思うに本書のことばは雅俗が併記されていて、風諭が備わっており、最も訳学に適している。）

という部分がある。「本業三書」とは通訳官登用の科挙で暗誦用に使用された書籍のことである。本稿ではこの「雅俚並陳…最長於譯學」という序文の記載に着目し、本書と同時期に朝鮮で使用された漢語教材との比較を通して、本書の漢語部分の語彙、語法の特徴を分析し、朝鮮訳学¹⁾が本書に求めた中国語とはどのようなものであったかという点について考察する。

1 《伍倫全備記》とその諺解について

1.1 《伍倫全備記》の版本について

該書の著者である邱濬については「明史」列伝に記録がある。それによれば、字は仲深。広東省瓊山県に生まれ、景泰5年（1454）に進士となり翰林院に入り、待講、学士、国子祭酒等を歴任した。著書には「大学衍義補」160巻などがある、明代の儒者であり高官である。彼の著書には《伍倫全備記》の外に、《投筆記》《高漢郷羅囊記》《拳鼎記》の3種の戯曲がある。

現存の《伍倫全備記》の版本には以下のものがある。

① 《新刊重訂附釈標註出相伍倫全備忠孝記》

明，世徳堂刊。北京図書館蔵。4刊4冊。《古本戯曲叢刊初集》文学古籍出版社 1954

に影印。

② 《新編勤化風俗南北雅曲伍倫全備記》

「奎章閣図書館韓国本綜合目録」集部に、赤玉峯道人（朝鮮）著。〔刊年未詳〕2巻2冊（以下略）

とある。羅錦堂1966では、赤玉峯道人は邱濬の別書とする。よって上記の「朝鮮」という部分は誤りである。また、「韓国古書綜合目録」

迂愚叟 木版本 4巻4冊 巴里東洋

とある。《古今人物別名辞典》陳徳芸1937によれば、迂愚叟は邱濬（宋代）²の別名となっている。

③ 《新編勤化風俗雅曲伍倫全備記》

「古鮮冊譜」によれば、

巴里東洋語学校蔵。4巻4冊、四つ切り本。愚叟序。第2の序無名。著者陳居靈。奎章閣本5冊なり。

巴里東洋語学校本の著者陳居靈については不明。奎章閣5冊とあるのは小倉進平1964に《伍倫全備》5冊とあるのと同一本である。

④ 《新刊摘滙奇妙全家錦囊大全伍倫全備》

この版本は羅錦堂1957に

此四書久已不存，今幸而還能在西班牙聖勞倫佐圖書館發現了他最盛名的伍倫全，一大快事。（この4巻はこれまで存在が知られていなかったが、今日、幸いにしてスペインのSan Lorenzo図書館で彼の最も著名な「伍倫全」が発見されたことは一大痛快事である）³

とあることから確認できた。

⑤ 《伍倫全備諺解》

上掲の奎章閣目録によれば、子部訳学類の項に8巻5冊、子部儒家類に8巻4冊本が所蔵されている。現在、亜細亜文化社から影印出版されているものは8巻5冊本に基づくものである。影印本を見る限り諺解本の体裁は他と異なり、曲の部分が全て削除され、台詞部分のみについてハングルによる漢字音注音、漢文による語句の注釈、本文中に引用されている成語の出典そして朝鮮語訳が付されている。

現在のところ筆者の手元にあるのは①と⑤の影印本のみである。本来ならば版本間の関係について詳細な比較を行うべきであるが、次の機会に譲ることとする。

本稿では論を進めるにあたって《伍倫全備諺解》を《伍諺》、諺解以前に朝鮮訳学教科書として使用された不特定の版本については《伍倫全備》と表記する。

1. 2 《伍倫全備諺解》の内容

本書の内容は「支那近世戯曲史」青木正児1934において、

伍典禮の前妻は倫全を生み、継室范氏は倫備を生む。又同僚の遺児克和を養子とす。典禮の死後、范氏は三子を育てて私なく、三子長じて母に孝、娶るところの婦は皆貞節なりしことを作れり。要するに父子の姓名既に人倫の道義を寓し、関白情節は即ち慈母孝子節婦の事、風教に益有りと雖も迂腐甚だし。

とある。この他にも《伍倫全備》の内容についての紹介は前掲の羅錦堂1957や劉大傑1982に

も見えるが、青木正児 1934 の域を出るものではない。以下少々詳しくあらすじを述べることにする。

伍子胥の子孫である伍全礼と正室の間の子倫全、継室の子倫備、全礼の同僚の遺児安克和、そして使用人の永安はある日街に遊びに出るが、途中酔漢にからまれてしまう。その場は何事も無くおさまるが、後日この男が何者かに殺され、4人に嫌疑がかかり裁判となる。4人は執拗な取り調べに対し、それぞれが罪をかぶって互にかばおうとする。結局4人は晴れて無罪になる。

継室の范氏は3人の兄弟に科挙に備えて勉強させるため、家庭教師を雇う。科挙に向かう途中、張打油と名のる人物と出会い同行する。(巻1～2)

伍倫全と伍倫備は科挙に及第し倫全は家庭教師の娘と結婚する。(巻3)

巻4では、伍倫全は諫議大夫、倫備は太守として家族と離れ任地に赴く。巻5では2人の任地での活躍が描かれる。倫全は誣告によって任を解かれ、辺境の神木寨に左遷され、神木寨に向かう途中、張打油と再会する。家で不幸が3度も重なり、葬儀を出す金が無いという張打油に百貫の銀と伍家に代々伝わる名剣の「鑊鏤」を与える。

巻6では家を離れて辺境の地にいる夫の身を案じ、正室は人を介して妾を夫の下へ送るが、妾が倫全の下へ向かう途中「夷狄の賊」に囚われ、妾は貞節を守るために井戸に身を投げ自害してしまう。一方倫全の赴任地にも「夷狄の賊」が現れ、倫全は囚われの身となってしまう。

そして巻7では倫全が賊に囚われたという知らせを聞いた倫備、安克和、永安が救出に向かい、彼らの勇気ある行動に賊は感化され、中国へ帰順することとなる。

巻8では、伍倫全、伍倫備、安克和兄弟と使用人の永安は「夷狄」を帰順させ、北辺の治安を回復した功が認められ、高い官職を授かって故郷に錦を飾る。

以上のようなあらすじであり、それぞれのエピソードの中に儒教的な教訓が盛り込まれている。

しかし、本書の文学作品としての評価はあまり高くなく、《中国文学発展史》劉 1982 では、呂天成の《曲品》や王世貞の《曲藻》の評を引用して、以下のようにいっている。

文字的迂腐，道學氣的濃厚是不待言的。曲品評道：「大老鋸筆，稍近腐」王世貞也說：「伍倫是文莊之老大儒之作，不免腐爛」這些批評自然是對的。不過在當代儒家獨存的社會里，一個做過文淵閣大學士的大儒，一個一天「子曰，子曰」的道學先生，不以戲曲為小道，竟然從事制做，這對於後學青年，自然會給予很大的影響。（書かれたことばは古臭く、儒学臭が濃厚なことは言うまでもない。《品曲》曰く「大老の鋸筆いささか古臭い。」王世貞も「伍倫全は文莊の老大儒の作品だが、腐乱は免れない。」これらの批評は当たっている。しかし当時の儒家独存の社会で、文淵閣大学士まで務めた大儒であり、一日中「子曰く、子曰く」とのたまっている儒家が戯曲を小道とせず、劇作に従事したことは後学の青年に自ずと大きな影響を与えたに違いない。）

1.3 朝鮮訳学における位置

冒頭に示した《伍諺》の序文にもある通り、李朝時代初期に漢学科試の暗誦用教材として使用されていた《直解小学》に代わって《伍倫全備》が使用されたわけであるが、本書の朝鮮伝来の時期や漢語教科書としての使用開始次期については具体的な記録が無い。この点について姜信沆 1985 では《光海君日記》12年11月戊子条に、

承文院啟曰、祖宗朝以來設文官漢語吏文肄習之規極嚴且重。漢語則通慣老乞大、朴通事、伍倫全備、（以下略）（承文院が申し上げるに、祖宗朝以来、文官の漢語、吏文講習の規則を嚴重に設けている。漢語は即ち老乞大、朴通事、伍倫全備を慣いとし…）

という記事があることから、光海君12年（1620）以前には既に《伍倫全備》が使用されていたと指摘している。前章に示した《伍諺》の序文には「本業三書、初用老朴及直解小學、中古以小學非漢語、易以此書。」とあり、この序文からすると《直解小學》の漢語が時用に合わなくなり、本書が教材として採用されたことになる。《直解小學》の漢語が時用に合わなくなったという記録は成宗14（1483）の実録記事に見える。

頭目葛貴見直解小學曰、反譯甚好而間有古語、不合時用、且不是官話、無人認聽（頭目葛貴《直解小學》を見て曰、反訳は甚だ好いのだが、所々に古いことばがあり、時用に合わない。さらに官話ではないので聞いてわかるものはない。）

との記録がある。さらに1473年（成宗4年）に刊行された《訓世評話》⁴（李邊著）巻末の上奏文には

直解小學逐節解説、非常用漢語也。老乞大、朴通事多帶蒙古之言、非純漢語、又有商價庸談、學者病之（《直解小學》は逐節解説し常用の漢語にあらず。老乞大、朴通事は多く蒙古のことばを帯び、純粋な漢語ではなく、また商人の庸談があるので学ぶものはこれを病む。）

とある。《訓世評話》は著者李邊の死後に刊行されたのだが、上記の上奏文は著者が生前に著書の正式な刊行を上奏したものである。この本が漢語教材として採用されたという記録はどこにもなく、また《直解小學》の後に他の教材が採用されたという記録もないことから、《直解小學》の漢語が「不合時用」と判断されてからまもなくして、《伍倫全備》が漢語教材として使用されたものと思われる。だとすれば本書の漢語教材としての使用時期も前掲の1620年の記録よりさらに前の成宗代（1470～1494）の後半にまで遡ると推測することも可能である。

そして1696年から1720年までの24年間を費やして《伍倫全備》に諺解が施されるのだが、その目的は《伍諺》に付された「凡例十二条」の第1条に、

一、學譯者以老乞大、朴通事及此編爲津梁、而老朴則有崔公世珍所撰諺解、輯覽爲後學指南。惜此編之出後時、獨未經講解、流轉師說各自異同眩於適從、故作此解、庶使歧說歸一焉。

（一、訳を学ぶものは老乞大、朴通事及び此篇を手引きとした。老朴には崔世珍が選じた諺解や集覧があり、後学の指南となったが、惜しいかな此篇が出た後、いまだに講解を経ず、伝わっている師の説はそれぞれ異なっていて、よってたつところが定かではないのでこの解を作り諸説を統一する。）

というところにあったようである。《伍諺》はいわば漢語教科書としてしばらく使用されてから諺解されたわけであるが、ここで《伍倫全備》が実際に使用されたと思われる期間を他の漢語教材の成書年や刊行年とともに一覧にまとめてみると次表のようになる。

なお、論を進めるにあたって、次のように略称を定める。次表②～⑤の老乞大、朴通事は漢語部分が同一なので、《翻老》《翻朴》で代表するが、先行研究からの引用で、その他の書名が出てくる場合にはそれに従う。《翻老》《翻朴》に共通して認められる事柄の場合には2書をまとめて、《翻老朴》と略す。次表①については《元刊本老乞大》とする。なお例文末尾には（）に巻数と張数を示し、a、bは裏表である。

	老乞大朴通事 成書年	他の教科書	備考
元	①元刊本《老乞大》	《直解小学》(失伝) 《訓世評話》1473以前成書	李邊の卷末上奏文 1483 質正官報告 1495 邱瓊歿
	②《老乞大》《朴通事》		
明	③《翻訳老乞大》1517 《翻訳朴通事》以前	《伍倫全備》使用の実録記事 1620	①の漢語改訂 ②③④⑤は漢語部分 は改訂されず、諺解 部分が改訂。 ②は成書年不明。
	④《老乞大諺解》1670 《朴通事諺解》1677		
清	⑤《旧刊老乞大》1745	《訳語類解》1690(辞書) 《伍倫全備諺解》1721刊行	⑧は漢語部分が②③ ④⑤と同一。
	⑥《老乞大新釈》1761 《朴通事新釈》1765		
	⑦《老乞大新釈諺解》1761 《朴通事新釈諺解》1765		
	⑧《重刊老乞大》1795 《重刊老乞大諺解》1795		

┆┆┆ は《伍倫全備》使用推定時期。

表は康実鎮 1985p40 をもとに作成。

2 《伍倫全備諺解》漢語文の性格

2.1 「胡人」の台詞

本書には匈奴墨特单于の後裔を名のる「夷狄の賊」一味が登場する。彼らの台詞には以下のような特徴がある。

a 「漢兒人」

これは胡人の中国人に対する呼称として使用されている。

- ① 把阿秃兒，今後不許説番語。都學漢兒人説話(7-12b)(勇者よ、今後番語を話すことは許さぬ。みな漢人のことばを学べ。)
- ② 這厮説谎，漢兒人到了是漢兒人。我達達人雖變得你的身，不變你蠻舌頭。(7-13a)
(こやつうそを言いおって、漢人は結局は漢人だ。我ら達達人はおまえの姿は変えられるが、おまえの野蛮な舌は変えられない。)
- ③ 生來偏愛答刺蘇，慮得漢兒人，便要討蒙孤(7-12a)(生来酒を好み、漢人を捕まえたらすぐに銀を要求するのだ。)

これに対して中国人の登場人物の台詞では自らの民族呼称に「中国人」を用いている。

- ④ 天地間生三等物。頭一等是中國人，第二等是夷狄，第三等是禽獸。唯人不可與夷人為配，亦如夷人不可配禽獸一般。(6-10b)(世の中には三等の物が生まれる。第1等は中国人、第2等は夷狄、第3等が獣だ。人が夷人と交わらないのは夷人が獣と交わらないのと同じだ。)
- ⑤ 我本是中國人。聽見那死鬼説，我出一身冷汗。我情願隨這老娘回中國去罷(6-14b)
(俺は本当は中国人だ。あの幽霊のことばを聞いて全身冷や汗が出た。この老婆について

中国に帰ろう。）

太田辰夫 1954 では「漢兒人」（漢人）「漢兒言語」（漢語）等の語について、「異民族支配下の漢民族のことで、金元代の作品にはよく見られるものだ。」としている。元代（高麗末）の成立とされる老乞大、朴通事でも「漢兒人」は中国人自身が自らの呼称として使用している。明代に著された本書に「漢兒人」の用例を認めるのは、単に胡人のことばであることを強調するためのレトリックと考えることもできるのだが、元代（高麗末）の成書とされる老乞大の《伍倫全備》と同時期に漢語教科書として使用された改訂版である《翻老》《翻朴》でも「漢兒人」は書き換えられておらず、さらに両書には「漢兒地面」（漢の土地）「漢兒言語」（漢語）「漢兒学堂」（漢人の学堂）等のことばも改訂されずに使われている。このことから、元代に漢人に対する呼称として使われた「漢兒人」は明代になってもまだ使用されていたと考えられ、《伍倫全備》での「漢兒人」も単に胡人の台詞であることを強調するためのものではないと考えられるのである。

b 蒙古語彙

胡人の台詞には多数の蒙古語が使われている。以下にそれを示す。

- ①哈敦〔按、哈敦番語女子之稱〕②騰吉里（天）③哈扎兒（地）④把阿秃兒〔胡語壯士之稱〕⑤帖里溫『頭』⑥答刺蘇『酒』⑦蒙孤『銀』⑧也克罕〔當作可汗後倣此〕⑨合石（玉）⑩秃魯哥（緞子）⑪速不揚（真珠）⑫塞因（好い）⑬按單迭延（織金襖子）⑭按單（金）⑮迭孤『死』⑯阿布（歩く）⑰納哥兒『下人』

以上17語である。□内は諺解部分の割注、○内は本文中の台詞に意味が記されているもの。『』内は朝鮮語訳文で意味が示されているものである。このうち⑧の「也克罕」は初出の部分（7-12a）に上記のような割注があり、朝鮮語訳文ではそのまま「也克罕」となっている。Lessing《Mongolian-English Dictionary》によれば「也克」はモンゴル語の〔yeke〕「大きい」にあたり、「也克罕」で「大王」の意味である。

⑰の「納哥兒」は諺解では「반당」（伴当）とあり、意味は「下人、使用人」（《李朝語辞典》）である。しかし1768年に蒙古語の辞書として朝鮮で刊行された《蒙語類解》⁵人倫門には「朋友」という見出し語に対する蒙古語として、ハングルで「누굴」〔nuoekul〕とある。「下人、使用人」の意味では《蒙語類解》では人品門に「자루차」〔jyalucya〕（見出し語は「使喚人」）としている。

④の「把阿秃兒」は（8-18a）に

令那把都兒每但有本事的都來呈獻

（あの勇者たちにもし腕前のある者がいればみな召し上げさせよ。）

とある。この台詞は主人公の伍倫全が部下に向かって言うことばで、この場面には胡人は現れていない。

c 人称代名詞「咱」

1人称複数を表す「咱」は胡人の台詞のみに認められる。「咱」が16例、同系の人称代名詞として「咱」が1例認められた。《伍諺》でのこれら人称代名詞の用法は1例を除いて全て聞き手を含むいわゆる「包括式」の用例である。

- ① 咱兩個兒都是納哥兒。收拾帳房，伺候咱也克罕出來。（7-12a）（我ら2人はどちらも友人だ。テントをかたづけて大王がお出ましになるのを待とう。）
② 咱是漢朝匈奴墨特單于的後代。烏孫公主便是咱家祖婆。咱祖宗以來，都是漢家的外孫。

把阿秃兒，今後不許說番語。(7-12b) (我々は漢朝匈奴墨特単于の後代である。烏孫公主こそは我らが祖先の母なり。我らは祖宗以来、皆漢王朝の外孫である。勇者よ、今後番語を話してはならぬ。)

- ③ 嗜好造化。拿一個人得三個人，正是彼求之而不得，嗜不求而自至，呵呵，叫他進來 (7-19b) (我らは運が好い。一人捕まえて3人を得た。まさに「彼此れを求めて得ず、我らは求めずして自ずといたる」ではないか。ハッハッハ、奴らをこれへ。)
- ④ 看起來，這伍大夫是忠義人。他決不肯爲嗜用，不但他一個忠義，他一家人都是忠義人。殺了他，騰吉里也不容嗜 (7-21b) (見ればこの伍大夫は忠義の人です。彼は決して我らに用いられようとはいたしません。彼一人が忠義の人ではなく、彼の一家は皆忠義の人であります。彼らを殺せば、天も我らを許しますまい。)
- ⑤ 你若肯把你事漢官裏的心，伏事嗜也克罕，富貴立可致 (7-22a) (おまえがもしおまえが漢人の役職に仕える心でもって我らが大王に仕えるのなら、財産と地位がたちまち得られるのだ。)

以上5例のうち⑤は胡人の伍倫全に対する台詞であり、除外式に取れる。

一方「咱」は1例のみであるが、除外式として使用されている。

- ⑥ 咱是你家奴。(7-16b) (我らはおまえの家来だ。)

これは大王がいかにか脅しても自分たちの配下になろうとしない伍倫全に対して、逆になだめるようにして言う台詞である。

「嗜」「咱」については呂叔湘 1940 や太田辰夫 1957 に詳しいが、これらの従来の説とは別に、劉一之 1988 及び梅祖麟 1988 では、現代北方語における1人称複数代名詞の排除式と包括式の対立は12世紀に始まり(劉一之)、しかもその原因はアルタイ系言語の影響である(梅祖麟)という指摘がある。本書でも「嗜」が胡人の台詞にのみ認められ、1例を除いた以外全ての「嗜」が包括式として使用されているのは興味深い点である。

2.2 中国人の台詞の特徴

中国人の台詞も必ずしも一様ではなく、かなり異なった形の台詞が認められる。以下にその典型的な例をあげる。

- ① 你看那個人家有女兒，出口與人做偏房的，俺討一個 (6-2b) (あなたはどちらかの家に女の子がいれば、すぐに人に妾にしてやると言いますが、私にも一人探してください。)
- ② 娘子休提，你未老裏，等到四十歲沒有兒子，再商量。(6-3a) (奥さんおよしなさいな。あんたまだ老いちゃいませんよ。四十になっても息子がいなかったら、また相談しましょ。)
- ③ 你家有壯丁沒有 (6-18a) (おまえの家には兵隊になるような丈夫な男はおるか?)

以下はこれに続く会話。

有丁只是不壯。有二寸長。(丁 (=釘) はありますが、丈夫ではありません。長さ二寸のがあります。)

問你家有好漢沒有 (おまえの家に立派な男子はいるかと聞いておるのだ。)

有媳婦懷了七個月胎，這個生出一定是好漢。(妻がおりますが、身ごもって7ヶ月になるんです。これが生まれりゃ、きっと立派な男になりますよ。)

これに対して、別の場面では、

- ④ 小官本以儒學出身，過承朝家誤恩，付以邊方之任。其於武事蓋非所長，願先生指教所以

守禦方略。(8-23a) (小官はもともと儒学の出身で、朝廷の過分な恩をたまわり、辺境の任についてございます。武事には長じるところがございません。願わくば先生に守禦の方法をご教示いただきたいと存じます。)

耕當問奴，織當問婦。邊方之事，非迂儒所知。(田畑を耕すことは使用人にたずね、布を織ることは婦人にたずねます。辺境のことはこの愚かな儒者の知るところにはございませぬ。)

願先生惠教。休謙。(先生どうかお教えてください。ご謙遜なさらずに。)

兵法有云…(以下略)(兵法に曰く…)

以上のように文言によって会話が行われている個所がある。①②は遠く辺境の任地にいる伍倫全のために正室の施叔清が妾を夫の下に送るべく、「媒婆」の張媽媽と取り交わしている会話。③は左遷の地、神木寨で迫り来る「夷狄の賊」に対抗すべく兵を募っている場面の会話。④からの会話は「夷狄の賊」を帰順させた功により、高い官位を授かった伍倫全とある儒者の会話である。庶民同士の会話、士大夫と庶民の会話では口語的な文体であるが、士大夫同士の会話は文言で行われている。

④からの会話に見られるような文言による会話について、前掲太田辰夫 1954 では、

文明主義の漢民族の社会においては、文語文を理解し、かつそれを作ることができるということが知識人の必修条件であったばかりでなく、同時にその素材であるところの文語(あるいはできるだけ文言に近いことば)が口頭語として用いられ、文語で語り、それを理解することがもとめられていた。

とある通り、知識人の間で交わされた口頭語を反映したものであり、更に①～④までの会話が、話し手の社会的階層によることばの違いを如実に表しているものであることは間違いない。

更にここで興味ある例を示したい。それは張打油と言う登場人物の台詞で、この人物は本書の各章に登場するのだが、彼が科挙の試験のために都に赴く伍倫全一行と出会い、同行する場面と夷狄の賊に囚われ、彼らの一味になっている時の場面、そしてそこで伍倫全らの態度に感化され、自分が中国人であることに目覚め、伍倫全らと共に夷狄の賊を帰順させてからの会話ではそれぞれにことばを使い分けているという事実である。

① 我本書已廢久矣，文科決不能成。且往邊上投軍，得一個官做，以儘吾君臣之義。(5-44 a) (私は書物を既に捨て去ってしまいましたので、文科には決して合格いたしません。

この上は辺境に赴き軍に身を投じることで官職に就き、吾が君臣の義を尽くそうと存じます。)

② 嚙兩個兒都是納哥兒，收拾帳房，伺候嚙也克罕出來(7-12a) (我らは2人とも友人だ。テントをかたずけて、我らが大王がお出ましになるのを待とう。)

③ 伍大夫，你認得我麼(中略)小人自從前日山庄相會，當與寶劍，轉賣與人得銀二十錠，葬了一家三個喪。因此欲去邊上尋大夫，報答此恩，中途爲胡人所慮(7-23b) (伍大夫、あなたは私を覚えていらっしゃいますか。(中略)私は以前山里で会いました時、宝剣をあたえていただき、それを人に転売したら銀20錠にもなりまして、一家の3度の葬儀を出すことができました。このため辺境に行き大夫を尋ね、この恩に報いようとしたが、途中胡人の囚われる所となりました。)

以上のうち①③は伍倫全との会話、②は夷狄の賊の塞での胡人との会話である。このような張打油の台詞の使い分けは社会的な階層によることばの差の存在を反映しているものと考えられる。

これまで見てきたとおり、朝鮮において漢語会話教科書として使用された《伍倫全備》のことばは、文言をもってなされる士大夫のことばとより口語的な庶民のことばが反映されている。これが《伍諺》の序文が言うところの「雅俚並陳」の一端である。

3 《伍倫全備諺解》の語彙、語法

以下では本書と同時期に漢語教材として使用された《翻訳老乞大》《翻訳朴通事》の漢語と比較しつつ、《伍諺》の漢語の特徴を分析する。

3.1 人称代名詞

a 1人称複数「俺」と「我每」

《伍諺》で使用されている人称代名詞で、1人称複数を表すものには「俺」と「我每」がある。使用頻度は「俺」が多数を占めるが、単数としての使用も認められる。「我每」は4例のみである。複数形の「俺」は包括式、排除式のどちらにも使用されているのに対し、「我每」は3例全てが聞き手を含まない排除式で使用されている。明かに聞き手を含む包括式として使用されている1人称複数人称代名詞は前章で述べたように、胡人の台詞にのみ見られる「咱」だけである。

香坂順一1983では

「俺」「咱(咱)」「您」は発生的には「～們」の合音宿約したものであるから、所謂複数を表しているはずである。しかし、これらはともに時には単数であり、時には複数である。のみならず、別に「俺們」「咱們」「您們」などのようにはっきりと「～們」を接辞している場合もある。

とあるように、元、明代の資料では「俺」は1人称の単複どちらにも使用される。以下は《伍諺》の用例である。

- ① 俺三人整頓衣冠往學中看一遍(1-10a)(我ら3人は衣冠を整えて学中へ行き、一度見てみよう。)
- ② 你可勸也克罕同俺歸順中國去罷(7-25a)(あなたは大王を勧めて、我々と中国に帰順しよう。)
- ③ 伍倫全，伍倫備是俺義哥哥(1-49b)(伍倫全、伍倫備は私の義理の兄である。)
- ④ 俺姐姐在這裡(2-39b)(私の姉はここにいます。)
- ⑤ 將俺兄弟每罵言(1-49a)(我々兄弟たちに罵言を吐きました。)

以上の例のうち、①②は明らかに聞き手を含む包括式で使われている複数の用例であり、③④は単数の用例。⑤は複数を表す接尾辞の「～每」と結びついた用例であり、且つ排除式の用例である。

《翻老》《翻朴》では「俺」の使用は確認されず、「我們」「咱」「咱們」が複数形として使用され、「我們」は包括、排除の両用、「咱」「咱們」は包括式に使用されている。

b 2人称複数「你每」「你們」「恁」

《伍諺》では「你每」が12例、「你們」が2例、「恁」が12例確認できる。「恁」については、上掲のように、「恁」も「俺」のように、元明時期には単複両用で使用される。《伍諺》では「恁」はやはり複数接尾辞「～們」或いは「～每」とは結びつかず、単独で使用されている。12例中「恁」が単独で明かに複数として使用されているのは、

- ① 呵呵，自古來叫恁達達做匈奴，你不是奴是世長。（7-16b）（ハッハッハ、昔からおまえら達達は匈奴と呼ばれていたのに、おまえは奴ではなくて、この世の主か。）

この1例のみで、他は「恁兄弟每」「恁兩個」「恁三人」「恁二位」「恁衆」のように後に複数を明確にすることばをとまなっている。また2例は単数の用例である。

- ② 同恁哥哥去觀場走一遭（2-25b）（おまえの兄と科挙の試験場に行って来なさい。）
③ 恁哥哥今在那里（3-23b）（おまえの兄は今どこにいるのか）

この2例はともに使用人に対する台詞である。

《翻老朴》では「你們」が2人称複数として使用され、「恁」「你每」は使用されていない。なお《翻老朴》には「們」が「馬們」などのように人以外の名詞にも使用されている例があるが、《伍諺》にはそのような例は確認できない。

c その他の人称代名詞

《伍諺》での人称代名詞の特徴的なのは、文言の「吾」「汝」「爾」が会話文中に確認できることである。

- ① 唯人不可與夷人爲配，亦如夷人不可配禽獸一般，吾今願死（6-2b）（ただ人が夷人と結ばれてはならないのは、また夷人が獣と交わってはならないようなものですから、私は今死をのぞむのです。）
② 生汝者父母也。教汝者先生也。（3-24a）（汝を生んだのは父母である。汝を教えたのは先生である。）

①の会話は伍倫全のもとへと向かう途中の妾が胡人に囚われた際に発することばである。②は伍倫全兄弟に母親が説教をたれる場面の台詞である。このような文言調の人称代名詞は《翻老朴》では一切使われていない。

3. 2 指示代名詞

a 「這等」「那等」「此等」「兀的」

「このような」「あのような」の意味で使用されている。《翻老朴》では「這般，那般」もしくは「這們，那們」が使用されているが、これらの用例は《伍諺》では確認できない。「此等」は文言的な言い方であるが、会話文に使われている。

- ① 這等去處也不好耍（1-10a）（このような場所も遊ぶのによくないところだ。）

「兀的」は7例認められる。《伍諺》の諺解部分の割注には「兀，元語彼也。」（兀は元のことばで「それ」である。）と注記されている。「兀的」は「阿的」「兀那」等とともに「これ」（「兀那」は「それ」）の意味で元代に多く使用された指示代名詞である。鄭光1999ではこの「兀的」「阿的」「兀那」について、ともに「蒙古文語の指示代名詞「ede」の音借表記であろう。」とその語源が蒙古語にあると指摘している。「兀的」は明代になっても《水滸伝》などの小説にその用例が認められるが、老乞大では、元刊本では使用されていた「兀的」が《翻老朴》になるとすべて「這的」⁶に書き換えられている。以下《伍諺》の例を示す。

- ① 兀的中间是一所儒學（1-7b）（この間が儒学の学校です。）
② 兀的不是三官人來也（3-34b）（これは3人のだんな様が来たのではなからうか。）
③ 兀的不是三官人來也（8-41b）（これは3人のだんな様が来たのではなからうか。）
④ 兀的柳林裏有幾個人家（5-41b）（あの柳の林の中に何軒か家がある。）

- ⑤ 兀的那里是井 (6-12b) (あそこは井戸だ。)
- ⑥ 兀的内中有一個仙女 (8-42b) (中に仙女が一人いる。)
- ⑦ 兀的又有一個仙姑來了 (8-43a) (ここにまた仙姑が来た。)

以上が全ての例であるが、場所を示す語が後に続いたり、②③では「兀的」自体が場所詞のような働きをしているようである。この点についてはより多くの文献の用例に当たらなくてはならないが、少なくとも《伍諺》においては元代の用法のように広く使用されてはおらず、固定化した用例となっている。

b 場所を表す指示代名詞

《伍諺》では場所を著すものとして「這裏／這裡」「那裏／那裡」「此間」「此處」がある。「這裏／這裡」「那裏／那裡」の「裏／裡」の書き分けについては、用例を見る限り単に文字の違いに過ぎない。「此間」は

- ② 左右，此間有姓伍的没有 (1-46a) (皆のもの、ここに伍という姓の者はおるか。)
- ③ 此間五馬坊伍太守家有三兒子 (1-46a) (この五馬坊伍太守の家には三人の息子がおります。)

以上の用例がある。この会話は江南東道採訪使という役職の役人とその部下の台詞である。文言的な「此間」が使用されている。

さらに、「此處」「在此」(ここに、ここで)「此」等、文言的なものが多数確認できる。文言的な指示代名詞「此」はこの他にも幅広く会話の中で使用されている。

3. 3 形容詞

a 「快」

梁伍鎮 1998 では《翻譯老乞大》《翻譯朴通事》で「好い」という意味で「快」が使われる例をあげている。以下にその例を示す。

- ① 這個馬快喫水 (「老諺上 31-2」) (この馬はよく水を飲む。)
- ② 快打刀子的人那里有 (「朴諺上 15-1」) (上手に刀を打つ人はどこにいますか)
- ③ 他快醫頭口 (「朴諺上 38-2」) (彼は上手に家畜を治療する。)

このほか 4 例報告されているが、ここでは 3 例にとどめておく。以上の例はここでは例挙しなかった 4 例も含めて、「快」は副詞的な用法で使われている。《伍諺》にも 1 例のみではあるが、これと同じ用例が発見できた。

- ① 北門合和坊有個張媽媽，平日快做媒。(2-8b) (北門の和合坊に張おばさんがいて、平素からよく仲人をしている。)

3. 4 副詞

a 程度副詞

《伍諺》の程度副詞には「十分」「忒」「好生」「好」「極」「最」「甚」「甚是」が認められる。「很」の用例は無い。太田辰夫 1985 では「很」について、

これが副詞として用いられた例は元代から見える。ただし、一定の文献にかぎってあらわれ、蒙古人と接触することの多い北方の人々の間におこなわれる俗語であったと想像される。(中略) なお元代では多く「很」と書く。

《元刊本老乞大》では「很」が 3 例認められるが、その後の改定版である《翻老》では 2 例

が「十分」に1例が「忒」に書き改められている。また《翻老》《翻朴》では、「底似」「好生」「好」「忒」「十分」「甚」「頂」等が使用されている。「頂」は現代後でも特に北方方言で使用される程度副詞である。《伍諺》にはその用例がない。梁伍鎮 1999 では「底似」について《朴通事諺解》に1例しか使用されておらず、清代に入ってから老乞大の改訂本である《朴通事新釈》では「底似」が含まれる文自体が削除されていることから、明代の改訂の際の遺漏であろうとしている。梁伍鎮 1998 出版後の発見された元刊本老乞大では「底似」の用例が複数報告されている（鄭光等 1999）。つまり「喂」「底似」は元代の漢語として「不合時用」とされ、明代の改訂で削除されたわけである。《翻老》《翻朴》そして《伍諺》の程度副詞は明代のそれと一致する。

b 禁止を表す副詞

《伍諺》では動作の禁止を表す副詞として「莫」「莫要」「休」「不要」「不必」「不用」「勿」

	《翻老》	《翻朴》	《伍諺》
別	3	13	φ
不要	4	13	7
休	36	32	15
不用	1	φ	3
莫	φ	φ	41
莫要	φ	φ	10
不必	φ	φ	8

が使用されている。《翻老朴》の禁止を表す副詞の使用状況と比較すると、上表のようになる。

《翻老》《翻朴》では「休」が多用されているが、《伍諺》では圧倒的に「莫」の使用が多い。また「別」は北方方言で使用されるもので、《伍諺》には確認できない。これは《翻老朴》と《伍諺》の基づく方言の違いによるものであると考えられる。「勿」は文言で使用されるもので、《伍諺》の士大夫同士の会話等に認められる。《翻老朴》には用例がない。

c 否定を表す副詞

ここでは特に現代語の「没/没有+V」に相当するものを扱う。現代語の否定副詞「没，没有」について、太田辰夫 1985 ではその出現を元明の頃と推定しているが、一般的に広く使用されるのは清代からである。元明代では主に「不曾+V」が使用される。《翻老朴》でも「不曾+V」が使用され、「没，没有」の副詞的用法は無い。《伍諺》でも「不曾+V」が多用されるが、さらに「未」の使用が認められる。これは文言調の会話文に使われている。「没」「没有」はすべて後に名詞をとめない「有」の否定、つまり「無い」の意味で使用されている。また「無い」の意味としては「無」「無有」の用例が認められる。

3. 5 前置詞

a 「把」

所謂「処置式」に使用する前置詞である。《伍諺》の用例を上げると、

① 把那文章不好處都掩藏了。(2-8b) (その文章のよくないところを隠してしまう。)

② 你把刀背向他頸上研着嚇他，看他怕不怕。(7-17a) (おまえは刀のみねをやつの首に押し当てて、やつが怖がるか見てみる。)

以上は一般的な処置式文であるが、太田辰夫 1985 に「(把が) なお時としては材料・用具をあらわすものと区別しがたい点もある」と指摘しているように、《伍諺》でも道具・手段を表す前置詞「用」と同義で使用されている用例が認められる。以下はその例である。

- ③ 人便把彈弓來打他 (4-37a) (人がパチンコでそれを打っている。)
- ④ 把板兩塊夾起來，一會便鋸了有何難。(7-18a) (板 2 枚で挟んで、ひとおもいに鋸引けば難しくなどあるものか。)

梁伍鎮 1998 では《翻老朴》の「把」の用例で 1 例のみ処置式文における否定詞「不」の位置が本来の位置である「把」の前ではなく、述語動詞の前に置かれている例をあげている。

- ⑤ 若官司知道時，把咱們不償命那甚麼 (朴諺中 28-1) (もし役人に知れたら、私たちの命で償わなければならないじゃないですか。)

1 例のみの用例であるため、単なる誤記とも考えられる。しかし《漢語方言語法類編》には蘭州方言に同様の現象があることが報告されている。アルタイ系の民族と接触することが多かった地域の方言に同様の現象があることからして、一考に価するかもしれない。《伍諺》ではこのような用例は確認できない。

b 「在」

「在」は「～で」をあらわす前置詞であるが、《伍諺》では 1 例のみではあるが、動作の方向を表す「向」や動作の到達点を意味する「到」と同じ意味で使用されている例が確認できる。

- ① 你如今在那里去 (2-36a) (あなたは今どこへ行ってしまったの。)

香坂順一 1983 では「在」が「向」「從」と同義で使用される例は宋代から元、明代の白話に多く見られるものだと指摘している。さらに宮田一郎 1986 ではこのような用例が「拍案驚奇」から「儒林外史」に至る下江官話で書かれた作品中に多く見られるとも指摘されている。《伍諺》も明代の南方で行われた「南戲」の一つであるので、この「在」の用例も或いは南方方言の影響であるとも考えられる。

c 前置詞の省略

康實鎮 1985 や梁伍鎮 1998 では《翻老朴》に特徴的な前置詞の用法として前置詞の省略を指摘している。以下は梁 1998 よりの例文の 1 部を引用する。

- ① 我今日／印子鋪里當錢去 (朴諺上 19-1) (私は今日高利貸しの店に行って金を借りる)
- ② 好大舍／那里下着哩 (朴諺上 51-2) (若旦那、どこへおいでですか)
- ③ 你如今／那里去 (老諺上 6-2) (あなたは今どこへ行きますか)
- ④ 做火伴／北京去 (老諺上 16-1) (道連れになって北京へ行く)

以上の例では／部分に前置詞が省略されている。本来ならばそれぞれ「到」や「往」或いは「向」が無ければならない。このような前置詞の省略について、康 1985 では「これはおそらく蒙古語或いは著者本人の母国語(韓国語)の影響から来ているものであろう。」また梁 1998 は「文章から一部の成分が省略されるこのような現象は口語体の特徴と見ることもできるが、(中略)蒙古語直訳体である元代漢語の影響から始まるものと見るのが妥当である。」と指摘されている。

《伍諺》でも前置詞を省略していると思われる用例が確認できる。

- ① 娘子，我娘／那里去 (7-42b) (お母さん私のお母さん、どこへ行ったのですか。)
- ② 你／南邊來，有速不揚麼 (7-19a) (おまえは南から来たのだから、真珠を持っているか?)

③ 你／那里去來（1-44a）（おまえはどこに行っていた。）

④ 你要／那里去（6-7b）（おまえはどこへゆくのだ。）

②は胡人の台詞であるが、その他の例は胡人の台詞ではない。或いは元代の蒙古語の影響による語法が明代の《伍倫全備》の時代にも残っていたとも考えられるが、少なくとも《翻老朴》にも見られるこのような現象が韓国語の影響でないことは確かなようである。《伍諺》の用例を見る限りでは、すべて述語動詞がそれ自体に方向性の含意がある「去」「来」であることから、このような場合は前置詞が省略される現象が或いはこの時代の口頭語に存在していたのかもしれない。いずれにせよ、より多くの文献の精査が必要である。

d 「與」

《伍諺》で「與」は前置詞（＝「給」「跟」「和」）、動詞（＝「給」）、結果補語（＝「V+給」）としての幅広い用例が確認できる。「給」は勿論、その前身とされる「饋」の用例も確認できない。太田辰夫1978では「與」について、

明代以前においては、《給》あるいはその系統の語はほとんど用いられず、その場合は《與》を使用した。（中略）《與》を以上のように介詞・助動詞⁸として用いることは明代までつづいた。

と説明しているが、《伍諺》での「與」の用例と一致する。以下は《伍諺》のそれぞれの用法の例である。

① 要頭把與他，要身決不與他（6-22b）（頭が欲しいのなら取ってそれをくれてやるが、体が欲しいといっても決してそれはやらん。）

② 又父親存日，與同郡安府判交好。（1-1b）（また父が生前、同郡安府判と懇意であった。）

③ 兄弟是手足，手與足都是一個人身上的形體。（5-13a）（兄弟は手足である。手と足はどちらも一人の人間の体にあるものだ。）

④ 相公説的是。我本心情願不爭田了、分與弟罷（5-13b）（旦那の言う通りでさ。おら本心じゃ田畑のことで争いたくはなかったんですよ。弟に分けてやりますよ。）

①の最初の例と④は「V+與」①の2つめは動詞、②の例は前置詞の「跟」、③の例は接続詞の「和」である。

これに対し、《翻老朴》では清代から使用が認められる「給」の前身とされる「饋」が使用されている。《翻老》に前置詞の2例、《翻朴》には動詞、前置詞、結果補語の用例が多数「與」の用例とともに確認できる。《伍諺》には「饋」の用例は認められない。

この他《伍諺》では「與」と平行して前置詞の「和」「同」が使用されている。

① 你可勸也剋罕同俺歸順中國去罷（7-25a）（おまえは大王に我々と中国に帰順して帰ろうとすすめてはくれまいか。）

② 同恁哥哥去觀場走一遭（2-25a）（おまえの兄と科挙の試験会場へ行ってきなさい。）

この他《伍諺》の「同」は動詞に前置して「一起」（一緒に）の意味で使用されているものがある。

③ 和你兩兄弟遊賞一遭（1-3a）（おまえたち2人の弟と遊びに行こう。）

④ 兄弟我和你此起程（6-35a）（弟よ、私とおまえはここで旅立とう。）

④は接続詞の用法。

一方、《翻老朴》での「和」と「同」の使用状況は康實鎮1985によれば、「跟」と「同」はやはり動詞として見るのが妥当である。後ろに通常「着」があるため前置詞としての用例は

無い。」としている。以下は康1985から例文を引用する。

⑤ 咱同着一時行。(朴諺上9後4) (我々は一緒に行こう。)

これに対し「和」は前置詞、接続詞の用法が認められ、一般的に使用されている。

⑥ 我和一個火伴先去(老22後10) (わたしはある友人と先に行きます。)

⑦ 將馬和布子(老5後9) (馬と布を)

《伍諺》では介詞としての用例が認められる「同」は《翻老朴》では動詞としての用例が見出せないのは、これらが基づく方言の差によるものと考えられる。現代語でも「同」は南方方言で多く使用されている。

3.6 反復疑問

孫錫信1992では老乞大朴通事の反復疑問文の形を3つのタイプに分類している。以下それを要約して示す。

1 語気助詞「那」であらわすタイプ

a 「X那Y」 XとYは反義の関係にある。「那」の他に「也」も使われる。

b 「X那、Y那、z那」 X、Y、Zは類義関係のことば。

c 「不X那甚麼」 反語の意味を表す。

2 否定の副詞「没」「不曾」を使うタイプ

a 「有+阿+没(不曾)」

b 「動詞+没(不曾)」

c 「没X+阿+怎麼」

3 「是…是…」のタイプ

である。《伍諺》の反復疑問文は

1 「V了(也)未V」

① 五般按酒都有了未有？(4-5b) (5種類の酒の肴は全部揃ったか)

② 五般果子有也未有？(4-7a) (5種類の果物は揃ったか)

②例目の「也」は変化を表す現代語の所謂「了2」と同じである。

2 「V了没」

① 供狀都了未？(4-13a) (供述書は揃ったか)

3 「V了未V」

① 你成親了未成親(6-8b) (おまえは結婚しているのか)

4 「V不曾V」

① 動不曾動？(7-5a) (動いたか)

5 「曾～不曾(否)」 不曾は「否」の時もある。

① 曾習舉業否？(2-6a) (科挙の準備をしたか)

② 曾有些子虧損不曾？(7-10a) (少し体が弱ったか)

この他に現代語にも通じる形の「有～没」「有～没有」(所有、所在を聞く)形が認められる。

① 他問有銀子没？(7-18b) (彼は銀があるかと聞いています。)

② 問有金子没有？(7-18b) (金があるか聞いています。)

③ 有秃魯哥安彈迭延没有？(7-19a) (金を織り込んだ上着はあるか。)

さらに、以下のようなものもある。

- ① 只顧我做得是與不是？（7-19a）
- ② 是你與妻生的不是（5-12b）
- ③ 相公那一件事做得不是（8-6a）
- ④ 不管人說與不說（8-6a）

以上までのように、《翻老朴》の選択疑問文の形式と《伍諺》のそれとでは一致しない。やはりこれも基づく方言の差によるものと考えられる。この点についても他の資料との比較対照を勧めなければならない。

これまでの語彙、語法に対する分析を通して、《伍諺》は同時期に漢語教科書として使用された老乞大、朴通事とはことばの質の面でかなり異なるものであることが明らかになった。

《翻老朴》が北方方言的なものに対し《伍諺》は非北方言語的な特長を有している。

4 まとめ

以上見てきたように、《伍諺》の漢語は蒙古語混じりの胡人のことば、中国人庶民のことばそして士大夫たちのあいだで交わされる文言調の会話と、多用な「ことば」が反映されている。また《伍諺》の漢語の語彙、語法の分析を通して、《翻老朴》が北方方言的な性格を見せるのに対し、南方方言的な要素を含んでいることがわかった。

以上のような特徴を持つ《伍倫全備》が朝鮮の漢語教科書として使用された理由は、元明交代時期における中国語の変化に対応するためであったと考えられる。即ち元代の蒙古語の影響を強く受けた所謂「漢兒言語」の衰退と明代からの「官話」の成立である。

1.3で示したとおり、李朝建国当初より漢語教科書として使用された《老乞大》《朴通事》《直解小学》が成宗4年（1473）刊行の《訓世評話》の巻末の李邊による上奏文では、《直解小学》の漢語が「常用の漢語にあらず。」また《老乞大》《朴通事》が「蒙古の言を帯び、純漢語にあらず。また商價の庸談あり。」として通訳官のための教科書として不適格であるとしている。その7年後の成宗11年（1480）と10年後の成宗14年（1483）には

質正漢語於載敬。敬見老乞大朴通事曰：此乃元朝時語也。與今華語頓異，多有未解處，即以時語改數節。（《成宗実録》11年）（頭目載敬に漢語を質正す。敬《老乞大》《朴通事》を見て曰、これは元朝の時のことばである。今の華語とは異なり、わからないところが多いので即数節を今のことばに改めよ。）

頭目葛貴見直解小學曰、反譯甚好而間有古語，不合時用，且不是官話，無人認聽（頭目葛貴《直解小学》を見て曰、反訳は甚だ好いのだが、所々に古いことばがあり、時用に合わない。さらに官話ではないので聞いてわかるものはない。）（《成宗実録》14年）

との報告が中国の遼東に派遣された質正官⁹からもたらされる。老乞大朴通事については、最近韓国で元代（高麗時代）に刊行された老乞大の版本が発見され、元代の所謂「漢兒言語」で書かれていることが確認され、また《直解小学》は現在は版本が見つかっていないが、この本を著した偈長寿が元末に朝鮮に帰化したウイグル人で¹⁰、元代に同じくウイグル人の貫雲石が著した《孝経直解》の文章からして、《直解小学》の言語が蒙古語直訳体であったことは想像に難くない。

これに代わる中国語が所謂「官話」で、明代になって共通語の地位を占めるのに従って、朝鮮でもこれに対応する漢語教科書が急遽必要になってきたわけである。明王朝の中枢にいた高

級官僚が著した戯曲の台詞は、実にそのまま「官話」であったのである。明代の官話を記録している宣教師資料の《賓主問答私擬》の言語について、古屋昭弘1989では《賓主問答私擬》の文言的な会話文と《老乞大諺解》《朴通事諺解》の俗語的な会話文を比較されて、

「老朴」の文体が基本的に商人を始めとする北方庶民の生活の場での口頭語であるのに対し、「賓主」の文体は、官僚を始めとする「読書人」たちの交流の場での口頭語を反映すると推定されるのである。

と指摘されている。

支配民族の蒙古人と被支配民族の漢人との「歩みより」言語であった元代の「漢兒言語」で記され、「商人を始めとする北方庶民の生活の場での口頭語」しか反映していなかった李朝初期の漢語教科書の欠点を補い、しかも士大夫たちの「かたい口語」に偏らず、庶民の「しゃべりことば」も反映されていた《伍倫全備》は中国での新たな言語の変化に対応する教科書であった。各階層の言語特徴が現れている「雅俚並陳」な《伍倫全備》はまさに「最長於譯學」であったのである。

註

- 1 特に朝鮮王朝時代の通訳官養成のための外国語教育及び研究を指して言う。司訳院が管掌した。漢学（中国語）蒙学（蒙古語）女真学（女真語、清朝成立後は「清学」と改称）倭学（日本語）の4言語を対象としたことから、「四学」とも言う。訳官は殆どが身分の低い「中人」階級で、漂流者の保護や護送、使臣に随行して外交実務に従事した。これとは別に文臣にも漢語の学習を奨励し、外国語に通じる者を訳学者といった。司訳院で使われた各国語の教科書や訳官や訳学者が編纂した教材類を「訳学書」という。
- 2 《中国人名辞典》によれば、
邱濬 宋 彰人。字道源。天聖進士、曆官殿中丞。（以下略）とある。
- 3 《風月錦囊考釈》 孫崇濤 2000年中華書局によれば San lorenzo 図書館はスペインマドリッド近郊の EL Escorialにある。
- 4 李朝初期の文臣出身の漢学訳学者李邊（1391～1473）が著した中国語教科書。文言で書かれた幾つかのエピソードを白話訳したもの。韓国では長く失伝していたが、名古屋市逢佐文庫の駿河御讓本中1冊として発見された。
- 5 《蒙語類解》1768年刊。中国語、朝鮮語、蒙古語の3言語対照語彙集。蒙学の教材として使用された。
- 6 《伍諺》では1例だけ「這的」が認められる。
拾你山上裏去，與我寨主做夫妻，生兒做頭目。這的便是人倫（6-12a）（おまえをかついで山へ行き、わが寨の主と夫婦にして、男の子を産んで頭目にする。これこそ人倫である。）
- 7 元代の蒙古語直訳体の文章では前置詞は多用されず、「～裏」（～で）「～行」（～に）等の後置成分が頻繁に使われた。
- 8 《中国語歴史文法》では「助動詞」と呼ばれている品詞は一般に言うところの動詞に後置される前置詞句（＝介詞句）のことを指している。
- 9 漢学教科書に記載された漢語について、実際に中国で使用されていることばと合っているかどうかについて調査するために、中国へ派遣された通訳官のこと。姜信沆1985によれば、成宗代（1470～1494）から宣祖代（1568～1608）までの間に実施された。
- 10 僕については朝鮮王朝実録に以下の記事がある。
判三司事僕長壽卒。字天民。其先回鶻高昌人。（中略）所選直解小學（《定宗実録》元年）
（判三事予司長壽卒。その出身はウイグル高昌の人。《直解小学》を選ずる。）

上問於待講官僕曰：爾祖先在中國時，居何處，仕於何時代。循對曰：臣之祖先居西番回骨之地。始仕於元太祖之世。上曰：爾叔父年幾歲世來，此知我國言語乎。對曰：臣叔父長壽年十九，眉壽年十七來此。言語亦粗知之。（《世宗實錄》7年）

（王が待講官の予に訊ねて曰、「汝の祖先が中国にいる時、どこにいて、どの代に仕えたのか？」循對して曰「私の祖先は西番のウイグルの地に住んでおりました。始めは元の太祖の世に仕えました。」王曰「汝の伯父はいくつの時に来たのか？彼はわが国のことばを知っていたのか？」對して曰「私の叔父長壽は19の時に、眉壽は17歳の時にここに來ました。ことばは粗方知っておりました。」）

この記録は僕長壽の甥にあたる僕循が世宗王の質問に対して答えたものである。この記録から《直解小学》の著者がウイグル人であったことがわかる。

参考文献

- 青木正児 1943《支那近世戯曲史》弘文堂
太田辰夫 1953「老乞大の言語について」《中国語学研究論集》第1号
太田辰夫 1954「漢兒言語について—白話発達史に関する試論」《神戸大論叢》
太田辰夫 1985《中国語歴史文法》（第3版）朋友書店
小倉進平 1966《増訂補注朝鮮語学史》刀江書店
香坂順一 1988《水滸語彙と現代語》光生館
香坂順一 1983《白話語彙の研究》白帝社
陶山信男 1973《朴通事諺解・老乞大諺解語彙索引》采華書林
古屋昭弘 1988「宣教師資料に見る明代の官話」《文学研究紀要》早稲田大学文学部
宮田一郎 1968「近世語に見える介詞について」《明清文学言語研究会単刊10》
黄伯荣主編 1996《汉语方言语法类編》青島出版社
康實鎮 1985《老乞大朴通事研究》台湾学生書局
孫錫信 1992「老乞大朴通事中的一些語法現象」《近代漢語研究》
魯国堯 1985「明代官話及其基礎方言問題—讀《利瑪竇中國禮記—》」《南京大学報（哲学社会科学）》
羅錦堂 1966《明代戲曲作家考略》香港龍門書店
劉大傑 1982《中国文学發展史》上海古籍出版
劉一之 1988「关于北方方言中第一人称代词包括式和排除式对立的产生年代」《语言学论丛》及15商務印書館
梅祖麟 北方方言中第一人称代词复数对立的来源 同上
姜信沆 1985《李朝時代の識学政策と識学者》塔出版社
梁伍鎮 1998《老乞大朴通事研究》太学社
林東錫 1982《朝鮮識学考》台湾学生書局
鄭光、梁伍鎮等 2000「元代漢語《旧本老乞大》新發掘識学書資料《旧本老乞大》」
《元代漢語本老乞大》慶北大学校出版部
影印本 1982《伍倫全備諺解》亜細亜文化
1982《老乞大朴通事諺解》亜細亜文化社
1972《翻譯老乞大 卷上》中央大学校出版局
1975《翻譯老乞大 卷下》仁荷大学校出版部
1974《明史》中華書局
1960《Mongolian-English Dictionary》Ferdinand Lessing University of California press
孫崇濤 2000《風月錦囊考釈》中華書局